

第3回記者会見資料

2014.9.30

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015
展覧会の構成および参加作家第二弾発表

Kyoto
International
Festival
of
Contemporary
Culture



PARASOPHIA

広報に関するお問合せ

京都国際現代芸術祭組織委員会事務局（PARASOPHIA事務局） 担当：大西、平

TEL: 075-257-1453 FAX: 075-257-1454

E-mail: press@parasophia.jp URL: www.parasophia.jp

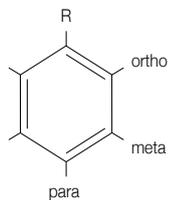
〒604-8152 京都市中京区烏丸通蛸薬師下ル手洗水町645 flowing KARASUMA 2階

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015について

アーティストックディレクター
河本信治

PARASOPHIAについて

PARASOPHIAという造語は、paraという軽い音感とsophiaという女性名詞との結合による心地よい脱力感、さらにその語感が誘導するベンゼン環の図像イメージをもとに着想しました。言うまでもなくsophiaは叡智や学問体系を意味し、paraは接頭辞で、パラドクス、パラソル、パラシュート、パラフレーズ、パラノイア、パラメーターなどのように、「別の、逆の、対抗的な」という意味で使われます。またparaは化学でお馴染みのベンゼン環の、結合基の位置関係オルト、メタ、パラにおいて対面の関係を示しています。ベンゼン環は城壁（結界）のイメージに繋がり、そしてそれは京都の歴史と都市形態の変遷についても想起させてくれます。長安に倣い794年から矩形グリッドで造営された平安京は、応仁の乱を経て痩せ細り南北に細長いびつな六角形となります。しかし京都は滅びることなく徐々に都市としての活力を回復し、19世紀後半からは東西に市街地を拡大させベンゼン環に似た形状を持つ現在の形に至ります。ベンゼン環は、不死の都市・京都の象徴的な図像なのです。



芸術支援都市京都

京都は、近世から近代、そして現代も、その時々生まれる先駆的な芸術家や思想家たちの活動を寛容に支援し続けてきた都市です。同時代の革新的な文化活動を、未知ゆえに恐れ排除するのではなく、それを穏やかに許容し支えてきた態度もまた、歴史都市京都が世界に誇り得る伝統の一つです。

社会構造が激変した第二次世界大戦後も、京都の各種施設や社寺、そして篤志家たちは、国内外の多様な芸術家たちを京都という場で支えてきました。1960-80年代に大規模現代美術展の会場として積極的にクストハレの機能を担った京都市美術館、新人作家の登竜門として機能した京都府ギャラリーの活動、芸術家たちと共に「新しきもの」に挑戦した多くのギャラリストたち、1960年代後期から展覧会という場を提供・継続することで日本の国公立美術館の中で最も積極かつ過激に、若い芸術家たちを支援し続けた京都国立近代美術館の活動、小規模ながら直接的に世界の〈現在〉に繋がることに挑戦した京都ビエンナーレ2003など、現代芸術に関して京都は多様で豊かな経験を蓄積してきました。

京都国際現代芸術祭の成立背景

京都国際現代芸術祭の構想は、京都が保持する文化資産や人材、そして現代芸術に関する経験の蓄積を、「異」質なものへの深い敬意を軸に統合し外に扉を開くことで、国内外の知性や才能が京都に集い対話し、思考し、創造活動を行う、文化と知の自由交易都市という明日の京都の姿を夢見た民間人の発想から始まりました。そしてこの着想は、京都経済同友会が実現可能な具体的計画案に纏め上げ、京都府、京都市そして文化庁が積極的に支援することによって実現される、わが国では稀な、民間主導かつ官民合同の、本格的な大規模国際展へと成長してきました。行政が民間の発想を尊重し支援する形は、きわめて健康的で今日的な文化行政のモデルと言えます。そしてこの形が実現できるのは、行政組織が十分に経験を積み成熟していることの証明でもあります。

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015

国内外から約40名の興味深い芸術家を招聘する予定です。いま世界各地で巨大規模の国際展が数多く立ち上げられ、出品作家も100名前後から200名程度が普通になりつつある中で、あえて京都は40名という小さな数を決断し、大き過ぎない、都市にとって適正規模の国際展を目指します。京都での国際展は出品作家に十分な展示スペースと細やかな支援体制を整えることを重視し、トレンド的な国際展とは少し距離のある、別の場所を提供します。参加作家がゆっくりと立ち止り、そこに集う人々と共に思考し、制作できる別の場所、para位置としての京都を創出することを目指します。PARASOPHIAは向こう側の、別の知性という意味です。PARASOPHIAという名前が、この国際展の固有色と個性を自然に生み出していくでしょう。

PARASOPHIAが目指すもの

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015は、思考と創造のためのプラットフォームでありそれ自体が、思考と創造を生み出すためのメディアです。それは、「既知っていることを再度確認する場=娯楽/エンターテインメント」ではなく、十年後の文化資産の生産と蓄積に向けた知のワークショップなのです。家族で楽しめる楽しく軽やかな外見と、国内外の専門家たちの知的共感も吸引する重層的で深い内容を持つ、持続する国際芸術祭の母体を生み出すことを目指します。

■ アーティスティックディレクター

河本 信治 コウモト シンジ

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015 アーティスティックディレクター
元・京都国立近代美術館学芸課長

京都工芸繊維大学大学院工芸学研究科修士課程意匠工芸学専攻修了。1981年より京都国立近代美術館研究員。2006-10年まで同館学芸課長。「横浜トリエンナーレ2001 メガ・ウェイヴ:新たな総合に向けて」共同ディレクター。2003年に第50回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展金獅子賞パビリオン部門国際審査委員ならびにドクメンタ12総合ディレクター選考委員を務める。主な企画展に「アゲインスト・ネチャー:80年代の日本美術」(1989)、「プロジェクト・フォー・サバイバル—1970年以降の現代美術再訪:プロジェクト<意志的・投企的>な実践の再発見に向けて」(1996)、「ウィリアム・セントリッジ—歩きながら歴史を考える:そしてドローイングは動き始めた……」(2009)。

開催概要

2ヶ月間にわたり京都市美術館の全館と京都府京都文化博物館を主会場に、複数の会場を有機的に連携させながら開催される京都で初めての大規模な現代芸術の国際展、PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015。国際交流と文化の集積地・京都を舞台に世界の第一線で活躍する作家約40名が作品を発表します。この芸術祭は参加作家がゆっくりと思考し、制作できる別の場所、para位置としての京都を現出することを目指します。

名 称	PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015
会 期	2015年3月7日(土)–5月10日(日)
会 場	京都市美術館、京都府京都文化博物館ほか
チケット	一般 1,800(1,400)円、大学生 1,200(900)円、70歳以上 1,200(900)円 *()内は前売り *高校生以下および18歳未満は無料 *前売券の発売は12月を予定
アーティストック ディレクター	河本信治 (元・京都国立近代美術館学芸課長)
主 催	京都国際現代芸術祭組織委員会、一般社団法人京都経済同友会、京都府、京都市
協 力	京都工芸繊維大学、京都市立芸術大学、京都嵯峨芸術大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、 成安造形大学
助 成	平成26年度 文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ 公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団、公益財団法人朝日新聞文化財団、公益財団法人花 王芸術・科学財団、一般財団法人ニッシャ印刷文化振興財団、公益財団法人野村財団、公益財団 法人ポーラ美術振興財団 *公益財団法人京都地域創造基金助成事業に採択
後 援	国際交流基金
認 定	公益社団法人企業メセナ協議会
テクニカルサポート	京都造形芸術大学ウルトラファクトリー SANDWICH
ウェブサイト	www.parasophia.jp
公式SNSアカウント	Twitter twitter.com/parasophiaPR Facebook facebook.com/parasophiaJP Google+ google.com/+parasophiaJP YouTube youtube.com/user/parasophiaVideos Instagram instagram.com/parasophia
お問合せ	京都国際現代芸術祭組織委員会事務局 (PARASOPHIA事務局) 〒604-8152 京都市中京区烏丸通蛸薬師下ル手洗水町645 flowing KARASUMA 2階 TEL : 075-257-1453 FAX: 075-257-1454 E-mail: info@parasophia.jp



運営組織

京都国際現代芸術祭組織委員会

名誉総裁 三笠宮 彬子 女王 ミカサノミヤ アキコ ジョオウ (*)

会 長 長谷 幹雄 ハセ ミキオ

一般社団法人京都経済同友会代表幹事、長谷ビルディンググループ(株式会社長谷本社)代表取締役社長

委員会	会 長	長谷 幹雄	京都経済同友会代表幹事
	副会長	門川 大作 山田 啓二	京都市長 京都府知事
	評議員	荒巻 禎一 河内 秀則 斎木 宣隆 佐々木 雅幸 白石 方一 建島 哲 増田 寿幸	京都文化財団理事長 日本放送協会京都放送局長 国際交流基金京都支部長 文化庁文化芸術創造都市振興室長 京都新聞ホールディングス代表取締役社長 京都市芸術文化協会理事長 京都経済同友会代表幹事
	幹 事	生田 義久 奥 美里 岡田 秀人 小田垣 勉 神山 俊昭 小西 貴彦 潮江 宏三 下田 元美 納屋 嘉人 細尾 真生 保科 秀行 八木 茂 山内 秀顯 若林 卯兵衛	京都市教育委員会教育長 京都市文化市民局文化芸術担当局長 京都市観光協会専務理事 京都府教育委員会教育長 京都府京都文化博物館副館長 京都府文化環境部文化政策監 京都市美術館館長 京都府立文化芸術会館館長 京都経済同友会京都国際現代芸術祭特別委員会委員長 京都経済同友会副代表幹事 京都府観光連盟参与 京都経済同友会理事・事務局長 京都文化交流コンベンションビューロー専務理事 京都経済同友会監事
	顧 問	秋山 喜久 有馬 頼底 安藤 孝夫 池坊 由紀 稲盛 和夫 マルクス・ヴェルンハルト 柏原 康夫 千 玄室 高階 秀爾 立石 義雄 服部 重彦 シャルランリ・プロソー 村田 純一	関西広域連合協議会会長 京都仏教会理事長 京都経営者協会会長 池坊華道会副理事長 稲盛財団理事長 ゲーテ・インスティテュート・ヴィラ鴨川館長 京都府観光連盟会長、京都市観光協会会長 裏千家大宗匠 大原美術館館長 京都商工会議所会頭 京都工業会会長 在京都フランス総領事、アンスティチュ・フランセ関西館長 京都文化交流コンベンションビューロー理事長
	監 事	藤井 龍美 松永 幸廣	京都銀行協会専務理事 京都監査法人マネージングパートナー

(敬称略・五十音順・法人種類略・2014年9月30日時点)

* 1981年生まれ。立命館大学衣笠総合研究機構客員協力研究員。慈照寺研修道場美術研究員。京都市芸術大学芸術資源研究センター特別招聘研究員。専門は在外日本美術コレクション研究、文化交流史。D.Phil.(オックスフォード大学)。著書に『文化財の現在・過去・未来』(編著 宮帯出版社 2013)、『写しの力ー創造と継承のマトリクスー』(編著 思文閣出版 2013)。

名誉総裁ご就任期間は、PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015の開催期間中です。



プロフェッショナルアドバイザーボード(※)

メンバー	石原 友明 伊東 正伸 越前 俊也 大野木 啓人 神谷 幸江 北野 圭介 リン・クック ワシフ・コルトゥン 佐藤 守弘 島本 澁 杉浦幸子 高橋 信也 椿 昇 クリス・デルコン 並木 誠士 ウテ・メタ・パウアー ロジャーM.ピュルゲル 平芳 幸浩 松尾 恵 森脇 清隆 山本 麻友美 吉岡 洋 芳野明 リゼッチ・ラニヤード	京都市立芸術大学美術学部教授 国際交流基金文化事業部企画役 同志社大学文学部教授 京都造形芸術大学副学長 広島市現代美術館学芸担当課長 立命館大学映像学部教授 ナショナル・ギャラリー・オブ・アート(ワシントンD.C.)視覚芸術高等研究センター、 アンドリュー W. メロン教授 SALTオンライン(イスタンブール) リサーチ&プログラムディレクター 京都精華大学デザイン学部長 京都精華大学芸術学部長 武蔵野美術大学芸術文化学科准教授 森ビル株式会社執行役員、森美術館館長付アドバイザー 京都造形芸術大学芸術学部美術工芸学科長 テート・モダン(ロンドン)館長 京都工芸繊維大学美術工芸資料館館長 南洋理工大学センター・フォー・コンテンポラリー・アート(シンガポール)館長 ヨハン・ヤコブ博物館(チューリヒ)館長 京都工芸繊維大学美術工芸資料館准教授 MATSUO MEGUMI+VOICE GALLERY pfs/w(京都)代表 京都府京都文化博物館学芸課映像・情報室長 京都芸術センター プログラムディレクター 京都大学大学院文学研究科美学美術史学教授 京都嵯峨芸術大学芸術学部教授 美術批評家(サンパウロ)
------	--	---

(敬称略・五十音順・法人種略)

以上24名

※ より優れた芸術祭の実現を目指すことを目的に、アーティストティックディレクターに
対して助言・サポートする専門家により構成する。

京都国際現代芸術祭組織委員会事務局

アーティストティックディレクター	河本 信治
キュレーター	中谷 至宏 (京都市美術館学芸課担当係長)
事務局長	尾崎 宣之
事務局次長	今岡 久登 (京都経済同友会事務局課長) 西田 宏幸 (京都府文化環境部文化政策課参事) 舟瀬 伴子 (京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課担当課長)
インターナショナルリレーションズ	一色 與志子
広報	大西 晶子 平 昌子

会場

京都市美術館

1933(昭和8)年11月、東京都美術館に次ぎ、日本で二番目の大規模公立美術館として設立。

館長：潮江 宏三

設計：前田 健二郎

竣工：1933(昭和8)年

延床面積：9,349 m²

所在地：京都市左京区岡崎円勝寺町124
(岡崎公園内)

アクセス：京都市営地下鉄東西線「東山」
駅下車徒歩10分



写真：福永一夫

京都府京都文化博物館

京都の歴史と文化を紹介する総合的な文化施設として、1988(昭和63)年に開館。

館長：荒巻 禎一

所在地：京都市中京区三条高倉

別館(旧日本銀行京都支店)

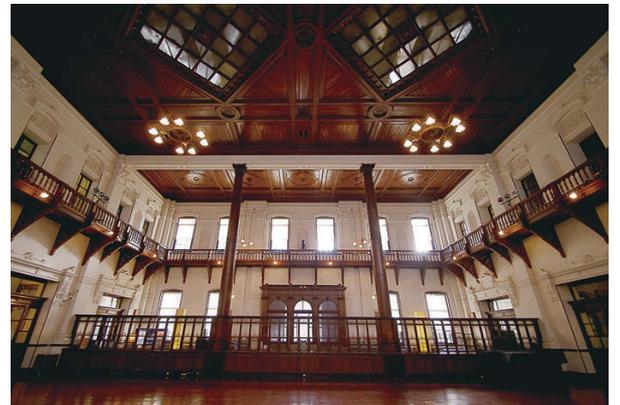
※重要文化財指定

設計：辰野 金吾・長野 宇平治

竣工：1906(明治39)年

延床面積：2,269 m²

アクセス：京都市営地下鉄「烏丸御池」駅5番
出口から三条通を東へ徒歩3分



*その他、堀川団地や鴨川などでも作家と共にリサーチを重ね、展示場所の拡張を計画しています。

オープンリサーチプログラム

芸術祭の会期だけでなく、その準備期間も芸術祭の一部として、調査研究のプロセスを公開し共有するため2013年6月より不定期で開催しています。これまで、参加候補作家によるレクチャー、海外の国際展のリサーチ、映像・映画の研究者や建築家、小説家などをゲストに招き、多岐にわたるテーマで行ってきました。プログラムは今後も不定期で開催する予定です。これまでのプログラムは、公式ウェブサイト内のレポート及び電子書籍『Parasophia Chronicle』において公開しています。

2013

- 6/21 オープンリサーチプログラム 01 [レクチャー]リピット水田堯
「猫と犬のように——映画とカタストロフ」
会場：京都府京都文化博物館 別館ホール
- 7/27 オープンリサーチプログラム 02 [報告会]田中功起+蔵屋美香
「抽象的に話すこと——ヴェネツィア・ビエンナーレに参加して」
会場：同志社大学 今出川キャンパス 良心館
- 9/6 オープンリサーチプログラム 03 [レクチャー/パフォーマンス]ドミニク・ゴンザレス
=フォルステル「M.2062 (Scarlett)」
会場：京都府京都文化博物館 別館ホール
- 10/14 オープンリサーチプログラム 04 [対談]ダイアログ——蔡國強×浅田彰
会場：京都造形芸術大学 人間館1階 ギャラリー・オーブ
- 10/25 オープンリサーチプログラム 05 [レクチャー]妹島和世
会場：flowing KARASUMA



クリス・テルコン「21世紀のための美術+建築——テート・モダン」写真：野々下祿斗

2014

- 2/16 オープンリサーチプログラム 06 [レクチャー]円城塔
「《時間の抵抗》へ寄せて」
会場：元・立誠小学校 スタディールーム
- 4/4 オープンリサーチプログラム 07 [レクチャー]クリス・テルコン
「21世紀のための美術+建築——テート・モダン」
会場：京都国立近代美術館 1階 ロビー
- 4/20 オープンリサーチプログラム 08 [レクチャー]スーザン・フィリップス
「You Are Not Alone」
会場：京都芸術センター フリースペース
- 4/29 オープンリサーチプログラム 09 [レクチャー]ビビロッチェ・リスト
会場：京都国立近代美術館 1階 ロビー
- 7/19 オープンリサーチプログラム 10-1 [連続レクチャー]眞島竜男
「全体タイトルは思案中」第1回「開いて閉じる、閉じて開く、開いて折りたたむ、折りたたんで開く：日本の近現代美術について(の2時間のレクチャー)」
会場：flowing KARASUMA
- 9/21 オープンリサーチプログラム 10-2 [連続レクチャー]眞島竜男
「全体タイトルは思案中」第2回「その公共性は誰のものなのか?：美術館、国際展、現代美術、アートについて(の2時間のレクチャー)」
会場：flowing KARASUMA
- 9/30 オープンリサーチプログラム 11 [レクチャー]アン・リスレゴ
会場：国際交流基金 さくらホール 2階



スーザン・フィリップス「You Are Not Alone」写真：米田有希



ビビロッチェ・リスト 写真：柳瀬安里

- 11/19 オープンリサーチプログラム 10-3 [連続レクチャー]眞島竜男
「全体タイトルは思案中」第3回「『ぶんでんていてんかいそていてんしんぶんでんてーん(仮)』、『北京日記』、『鶴沼相撲・京都ボクシング』、『日本近代美術/楽しむ国土』：眞島竜男の作品について(の2時間のプレゼンテーション)」
日時：2014年11月19日(水) 17:00-19:00
会場：京都府京都文化博物館 別館ホール



眞島竜男「全体タイトルは思案中」第1回「開いて閉じる、閉じて開く、開いて折りたたむ、折りたたんで開く：日本の近現代美術について(の2時間のレクチャー)」

参加作家一覧

リサ・アン・アワーバック	Lisa Anne Auerbach	1967年アナーバー(アメリカ)生まれ、ロサンゼルス在住
ナイリー・バグラミアン	Nairy Baghramian	1971年エスファハーン(イラン)生まれ、ベルリン在住
蔡國強(ツァイ・グオチャン)	Cai Guo-Qiang	1957年泉州(中国)生まれ、ニューヨーク在住
ヨースト・コナイン	Joost Conijn	1971年アムステルダム(オランダ)生まれ、在住
スタン・ダグラス	Stan Douglas	1960年バンクーバー(カナダ)生まれ、在住
サイモン・フジワラ	Simon Fujiwara	1982年ロンドン(イギリス)生まれ、ベルリン在住
ドミニク・ゴンザレス=フォルステル	Dominique Gonzalez-Foerster	1965年ストラスブール(フランス)生まれ、パリおよびリオデジャネイロ在住
ヘフナー/ザックス	Hoefner/Sachs	フランツ・ヘフナー: 1970年シュタルンベルク(ドイツ)生まれ、ベルリン在住 ハリー・ザックス: 1974年シュトゥットガルト(ドイツ)生まれ、ベルリン在住
石橋義正	Yoshimasa Ishibashi	1968年京都(日本)生まれ、在住
笠原恵実子	Emiko Kasahara	1963年東京(日本)生まれ、藤沢在住
ウィリアム・ケントリッジ	William Kentridge	1955年ヨハネスブルグ(南アフリカ共和国)生まれ、在住
アン・リスレゴ	Ann Lislegaard	1962年トンスベルグ(ノルウェー)生まれ、コペンハーゲンおよびニューヨーク在住
眞島竜男	Tatsuo Majima	1970年東京(日本)生まれ、川崎および別府在住
アーノウト・ミック	Aernout Mik	1962年フローニンゲン(オランダ)生まれ、アムステルダム在住
スーザン・フィリップス	Susan Philipsz	1965年グラスゴー(イギリス)生まれ、ベルリン在住
フロリアン・プムヘスル	Florian Pumhösl	1971年ウィーン(オーストリア)生まれ、在住
ピピロッティ・リスト	Pipilotti Rist	1962年グラープス(スイス)生まれ、チューリヒ在住
アリン・ルンジャン	Arin Rungjang	1975年バンコク(タイ)生まれ、在住
笹本晃	Aki Sasamoto	1980年横浜(日本)生まれ、ニューヨーク在住
高嶺格	Tadasu Takamine	1968年鹿児島(日本)生まれ、秋田在住
田中功起	Koki Tanaka	1975年益子(日本)生まれ、ロサンゼルス在住
アナ・トーフ	Ana Torfs	1963年モルツェル(ベルギー)生まれ、ブリュッセル在住
ローズマリー・トロッケル	Rosemarie Trockel	1952年シュヴェーアテ(ドイツ)生まれ、ケルン在住
ヤン・ヴォー	Danh Vo	1975年ハリア(ベトナム)生まれ
王虹凱(ワン・ホンカイ)	Hong-Kai Wang	1971年虎尾(台湾)生まれ、ウィーンおよび台北在住
やなぎみわ	Miwa Yanagi	1967年神戸(日本)生まれ、京都在住

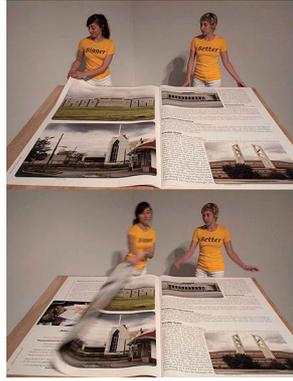
*2014年9月現在、最終的に約40組/名を予定

参加作家詳細

リサ・アン・アワーバック Lisa Anne Auerbach

1967年アナーバー(アメリカ)生まれ、ロサンゼルス在住

www.lisaanneauerbach.com
www.americanmegazine.com



Lisa Anne Auerbach, *American Megazine #1*, 2013. Ink on paper. Installation view with mega-girls, Los Angeles Municipal Art Gallery, 2013. Photo by Lisa Anne Auerbach, courtesy of Lisa Anne Auerbach and Gavlak. © Lisa Anne Auerbach

元々写真を学んでいたが、2004年のアメリカ合衆国大統領選挙のときにメッセージを編み込んだニットを制作し、それ以来、同様のニット作品を数多く発表。2013年には、カリフォルニアやアリゾナなどに点在する巨大教会の写真を掲載した約150×100cmのZINE『American Megazine #1』を制作。#2は今年のホイットニー・ビエンナーレ2014に出品された。彼女は1990年代のフェミニストによるパンクやロックのバンド、ZINE(私製本)の流行などのムーブメントを、知的共感とともに、日常感覚として肌で感じとり継承している。自分自身の日常からの生まれたシンプルな発想を起点に、個人が使用可能な既存の素材やメディアを駆使し、自分の手で制作することに固執しながら生み出される作品は、日常の中に非日常が交錯する遊戯的で批評性に満ちている。

ZINEシリーズ最新作『American Megazine #3』をPARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015のために構想中。10月に初来日して京都でリサーチを行う予定。

ナイリー・バグラミアン Nairy Baghramian

1971年エスファハーン(イラン)生まれ、ベルリン在住



Installation view of Nairy Baghramian, *Fluffing the Pillows*, Kunsthalle Mannheim, 2012. Courtesy of Galerie Buchholz, Berlin/Cologne

1985年にベルリンに移住。クンストハレ・パーゼル(2006)、バーデン=バーデン州立美術館(2008)、サーペンタイン・ギャラリー(ロンドン、2010)、バンクバー・コンテンポラリー・アート・ギャラリー(2013)、スカラブチャーセンター(ニューヨーク州ロングアイランド、2013)、シカゴ美術館(2014)、セラルヴェス美術館(ポルトガル・ポルト、2014)などで個展開催。ヨーロッパを中心にグループ展多数。ミュンスター彫刻プロジェクト07(2007)、第5回ベルリン・ビエンナーレ(2008)、2011年のヴェネツィア・ビエンナーレ、第8回ベルリン・ビエンナーレ(2014)などの国際展に参加。バグラミアンの複合的な彫刻実践は、モダニズムやミニマリズムそしてデザインの成果に対する深い理解と、素材や技巧および制作過程への興味とを伴う、彼女のフォーマル、コンセプチュアルおよび批評的な関心によって導き出されたものであり、その作品は展覧会を創る様々なアプローチにおいて立ち現れる、矛盾し対立する複数の歴史に対し敏感に反応する。PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015は、アジアで初めて作品を展示する機会となる。

蔡國強 Cai Guo-Qiang

1957年泉州(中国)生まれ、ニューヨーク在住

www.caiguoqiang.com



蔡國強「農民ダ・ヴィンチ」2013 サンパウロ、ブラジル銀行文化センター屋外での展示風景 Photo by Joana França

北京オリンピック開会式の花火の演出、火薬で描く「火薬絵画」などのダイナミックな作品制作や奇抜なプロジェクトで世界的に知られる。1986-95年、日本に滞在。1994年には京都市役所前で「長安からのお祝い——平安建都1200年のためのプロジェクト」を行う。その後ニューヨークに活動拠点を移し、漢方薬や風水など、中国の伝統文化を題材に彼独自の批判精神を加えて現代美術の言語に置き換える作品を制作している。1999年にはヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞を、2007年にヒロシマ賞を、そして2012年に高松宮殿下記念世界文化賞を受賞した。彼は十年近くの時間をかけて、中国僻地の農民が知的な好奇心と製作衝動によって日常生活の身近な材料だけで自作した、ロボットや潜水艦、飛行機などを収集する「農民ダ・ヴィンチ」のプロジェクトを続けている。この一部と派生プロジェクト「子どもダ・ヴィンチ」、それに京都のための新たなプランを加えたものが、PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015の核となる。

ヨースト・コナイン Joost Conijn

1971年アムステルダム(オランダ)生まれ、在住

www.joostconijn.org



Still from Joost Conijn, *Vliegtuig (Airplane)*, 2000. Video, 29 min.

リートフェルト・アカデミー(1992-95)、サンドバーグ・インスティトゥート(1995-97)で学ぶ。「飛びたい」という衝動から、27歳でパイロットライセンスを取得、2000年、手製の飛行機による飛行をサハラ砂漠で試みた。2001-02年には木炭ガスのエンジンを搭載した木製自動車で、ベルギー、ドイツ、チェコ、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、モラヴィア、トランシルヴァニア、ウクライナ、ブルガリア、マケドニア、アルバニアなど、ヨーロッパ15カ国を廻る。2007年モロコシ北部リーフ地方を友人二人とともに自転車で走行。これら旅の記録は、映画や写真、書籍など様々な媒体へと展開され、作品として発表されている。自分の好奇心や衝動を、既成の交通手段ではなく手作りの乗り物で実現し、事前計画に忠実ではなく行き当たりばったりで国や文化の境界線を自由に往来する彼の態度は、既存の諸システムに依存する現代について再考を促す、まさにパラ位置の知性と言えるだろう。

スタン・ダグラス Stan Douglas

1960年バンクーバー(カナダ)生まれ、在住



Installation view of Stan Douglas, *Luanda-Kinshasa*, 2013. Single-channel video projection, 6 hr. 1 min. (loop), color, sound

1980年代中頃から、特定の場所で発生した事件や出来事を調査し、あまり知られていない忘れられた歴史を再考する写真やビデオ、映像作品を制作。彼はドキュメンタリーとフィクションの狭間で、作家の意図として作品そのものが現れる、挑戦的で開かれた作品を制作している。ヴェネツィア・ビエンナーレ(1990・2001・2005)、ドクメンタ(1992・1997・2002)など数多くの国際展に出品、近作による展覧会「Stan Douglas: Mise en scène」は2016年までヨーロッパを巡回している。

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015へ出品を予定している最新のビデオインスタレーション作品《Luanda-Kinshasa》(2014)は、「The Church」と呼ばれたコロンビア・レコードの伝説的なニューヨーク30番街スタジオ(1949-81)の再構成を舞台にしている。本作の設定である1974年は、ポルトガルがアンゴラ(ルワンダ)といったアフリカの植民地から撤退し始めた年であり、当時のザイール(キンシャサ)でモハメド・アリがジョージ・フォアマンに挑み「キンシャサの奇跡」と呼ばれる逆転勝利を果たした年でもある。本作に登場する10人のミュージシャンは、マイルス・デイヴィスのアルバム『On the Corner』(1972)と当時のアフロビートが融合した音楽をつくり出している。

サイモン・フジワラ Simon Fujiwara

1982年ロンドン(イギリス)生まれ、ベルリン在住



Still from Simon Fujiwara, *Studio Pietà (King Kong Komplex)*, 2013. Mixed media installation with video, 20 min. 30 sec.

2005年ケンブリッジ大学卒、建築を専攻。フランクフルト造形美術大学でサイモン・スターリングのもとで美術を学ぶ。2010年、フリーズ・アートフェアのカルティエ・アワードを受賞。2012年、テート・セントアイヴスにて大規模回顧展を開催。フジワラ自身の出自や家族の歴史を出発点に、綿密な調査に基づく事実とフィクションを融合させた彼の私的な物語は、作品の形をとることで無数の他者の物語と緩やかに結び付き、少しずつ変化しながら彼の内部ではなく外側へと広がっていく。

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015では、解体直前の旧・帝国ホテル本館での両親の出会いを題材とした《Aphrodisiac Foundations (Imperial Hotel, Tokyo 1968, King Kong Komplex)》(2013)を軸に、《Studio Pietà (King Kong Komplex)》(2013)の一部などを加えながら、アイデンティティとセクシュアリティを巡るより普遍的なインデックスとなる作品に挑戦する。

ドミニク・ ゴンザレス=フォルステル Dominique Gonzalez-Foerster

1965年ストラスブール(フランス)生まれ、パリおよびリオデジャネイロ在住

www.dgf5.com



PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015 オープンリサーチプログラム03【レクチャー/パフォーマンス】ドミニク・ゴンザレス=フォルステル「M.2062 (Scarlett)」京都府京都文化博物館別館 2013年9月6日 写真・林直

グルノーブルの美術学校を卒業後、80年代後半から自身が「ルーム」と呼ぶ一連の部屋のインスタレーションを制作する。映像、光、音、家具などが組み合わされるその作品は、知覚を通じて鑑賞者の記憶を刺激し、作品である室内を物語に満ちた本であるかのような空間に変容させる。彼女の作品は、作品状況を生み出す過程で生じる物理的・心理的構成要素の間の関係性、特に制作過程での人々の関与を重視しており、その作品はリレーショナル・アートとして分類されてきた。近年はシネマ、テキスト、本、言語から発生するイメージとフィクション(物語)の、織物にも似た複雑な関係を、様々なメディアを使いながら深く静かに考察する作品を制作。2012年より、小説や映画の登場人物など、様々な人物として現われ、テキストと音楽を用いて行っているレクチャー/パフォーマンスのシリーズ「M.2062」を開始。2013年9月にはPARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015のための習作として《M.2062 (Scarlett)》が上演された。

ヘフナー/ザックス Hoefner/Sachs

フランツ・ヘフナー: 1970年シュタルンベルク(ドイツ)生まれ、ベルリン在住

ハリー・ザックス: 1974年シュトゥットガルト(ドイツ)生まれ、ベルリン在住



Hoefner/Sachs, *Real Restate*, 2011. © Hoefner/Sachs

フランツ・ヘフナー(Franz Hoefner)とハリー・ザックス(Harry Sachs)の二人組。ベルリンを拠点に活動するユニットで、都市環境下の建築と居住の問題を過激なユーモアを盛り込んだ美術的手法を使い、プロジェクト、パフォーマンスとして作品化している。彼らの作品には、単なるシェルターとしての「住宅」と長く生活する空間としての「住居」との建築的境界線を問いかけるものが多い。その一例である2006年の《Honey Neustadt》プロジェクトでは、旧東ドイツ・ハレの化学プラント労働者のベッドタウン、ハレ=ノイシュタットで1960年代から1980年代後半にかけて建てられたプレハブ住宅を模し、発泡スチロール製の巣枠を積み上げてミニ住宅を作り、当時大量発生して駆除の対象になりかけた100万匹のミツバチのための労働者住宅としての蜂の巣を設置した。そこで収穫された蜂蜜は商品ならびに美術作品として販売された。

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015では、京都での都市調査に基づくプロジェクトが構想されている。

石橋義正
Yoshimasa Ishibashi

1968年京都(日本)生まれ、在住
www.ishi-pro.com



『ミロクローゼ』2011 監督・脚本・製作・編集:石橋義正
© Milocrorze Project

京都市立芸術大学大学院造形構想在学中にロイヤル・カレッジ・オブ・アート(ロンドン)映画科に交換留学後、アマチュアの俳優と共に低予算で制作した16mm映画『狂わせたいの』(1997)が日本映画プロフェッショナル大賞新人監督賞を受賞、映画界だけでなく一部の美術関係者からも「上質なB級映画」として高い評価を受けた。最新作は山田孝之主演『ミロクローゼ』(2011)。また、美術、音楽、映像が融合するグループ「キュービキュービ」を主宰し、作品制作やパフォーマンスを行っている。その領域横断的で過激な娯楽性に満ちた作品は、1999年の「身体の夢」(京都国立近代美術館)への出品以降、世界各地の美術館や国際展に招待されている。2010年に丸亀市猪熊弦一郎現代美術館で個展開催。2011年の京都創生座とのコラボレーション作品『伝統芸能パリアブル』(京都芸術劇場春秋座)では、女性たちによる古典芸能のステージに3D映像を使用して話題を呼んだ。

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015では先行して、勉強会の開催やオリジナルPVの発表を行っている。

笠原恵実子
Emiko Kasahara

1963年東京(日本)生まれ、藤沢在住
www.emikokasahara.com



笠原恵実子《Double Urinal》1994 大理石、水、漂白剤

多摩美術大学大学院美術研究科修了後、1995年から2014年までニューヨークを拠点として活動。これまで「日本の現代美術1985-1995」(東京都現代美術館、1995)、横浜トリエンナーレ2001、第14回シドニー・ビエンナーレ(2004)など、世界各地の国際展やグループ展に参加。大理石やシリコン、人工毛髪といった無機質でありながら女性的な質感も連想させる素材を用いて、冷静かつ繊細に世界を捉えた作品を制作。2000年から、世界85カ国にあるキリスト教会の献金箱を撮影した写真と、その記録を元に自ら作り出した彫刻作品で構成されるインスタレーション「Offering」を制作、グラーツ民族学博物館(オーストリア・グラーツ、2005)、ヨコハマトリエンナーレ2014で発表した。この作品において笠原は、10年以上にわたる丹念なフィールドリサーチの記録と、そこから展開するオブジェの制作という一連の過程を可視化し、その結果を写真および彫刻作品へと昇華させている。西洋を起源とする制度や二元的思想への疑問から、その状況を象徴する人工遺物を収集、提示、そして変化させる行為を試み、その継続的な実践を通じて異なる解釈や提案を生み出す可能性を追求している。

ウィリアム・ケントリッジ
William Kentridge

1955年ヨハネスブルグ(南アフリカ共和国)生まれ、在住



PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015 プレイベント【作品展示】ウィリアム・ケントリッジ《時間の抵抗》展示風景 写真:四方邦照

「動くドローイング」とも呼ばれる素描をコマ撮りした手描きアニメーション・フィルムで世界的に知られた美術家。人形劇やオペラの舞台監督、俳優、演出家、著述家など多彩な分野でも活躍している。近年は複数の人々を巻き込む大規模な構成の作品が増えたが、あくまでも彼の作品は、スタジオ内での膨大な思索と手作業が集積されたアニメーションと彼自身の身体的思考が基本である。彼の母国である南アフリカの状況を、「自分のスタジオ」を起点として考察し、ヨーロッパ近代の知と技術史を手掛かりに、身体感覚を伴う堅実な歩みで人間の普遍的な問題を検証し、視覚的な表現へと昇華している。日本では2009-10年に京都国立近代美術館ほか2都市での大規模な個展の開催、2010年には第26回京都賞(思想・芸術部門)を受賞するなど、日本および京都との関係も深い。

2012年ドクメンタ13に出品された壮大なビデオ・インスタレーション《時間の抵抗》は、PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015のプレイベントとして、2014年2月-3月に京都の元・立誠小学校講堂で展示された。

アン・リスレゴ
Ann Lislegaard

1962年トンスベルグ(ノルウェー)生まれ、コペンハーゲンおよびニューヨーク在住
lislegaard.com



Ann Lislegaard, *Oracles, Owls... Some Animals Never Sleep*, 2012-14. Double-channel 3D animation with sound. Still from animation shown at the 19th Biennale of Sydney, 2014. Courtesy of the artist and Murray Guy Gallery, New York

S.R.テイレイニーの『ダールグレン』やU. K. ル・グインの『闇の左手』などのSF小説から着想した3Dアニメーションや音響+光のインスタレーションの作品で知られる。彼女はSF小説の中に、言語や物語、性別役割分担やセクシュアリティ、そして未来のコンセプトなどへの別のアプローチを見出す。

彼女の作品《Crystal World (after J.G. Ballard)》(2006)は、緩慢に結晶化していくホテルが舞台となっている。建物の中をアニメーション映像が移動するにつれ、女性建築家リナ・ポ・バルティの家具やロバート・スミツソンの彫刻《The Dead Tree》、エヴァ・ヘス《Untitled (Rope Piece)》などに遭遇する。これら「バーチャル・レプリカント」は、時間が崩壊した設定の結晶世界の中で、暫定的登場人物として再び動き始める。

フィリップ K. ティックの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』を題材にした近作《Oracles, Owls... Some Animals Never Sleep》(2012-14)では、CGアニメーションのフクロウが、格言や『易経』の予言と一人のフェミニストの弁論から引用した曖昧な断片を独白している。押しつぶされた鳴き声によって遮られるこの独白は、リドリー・スコットの『ブレッドランナー』の一部を誇張し歪曲したものである。それは時として威嚇的ではあるが滑稽でもあり、その滑稽さは複製、再複製されたセルフの、不揃いなダンスや寝落ち寸前のような動きによってさらに強調される。

ヴェネツィア・ビエンナーレ(2005)、サンパウロ・ビエンナーレ(2006)、リヨン・ビエンナーレ(2013)、シドニー・ビエンナーレ(2014)に参加。また、アストルップ・ファーンリ現代美術館(オスロ、2007)およびテトロイト現代美術館(2009)などで個展を開催している。

眞島竜男 Tatsuo Majima

1970年東京(日本)生まれ、川崎および別府在住



眞島竜男《鶴沼相撲・京都ボクシング》2010 TARO NASUでの展示風景 2010 写真:木奥恵三 Courtesy of TARO NASU © Tatsuo Majima

ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ美術科卒業。ロンドンから帰国後発表した1930年代の日本洋画界を題材にした《日本近代美術/楽しき国土》(1995)では、里見勝蔵、児島善三郎、三岸好太郎、福沢一郎といった独立美術協会のメンバーが野外に集い、ワインやバーベキューを楽しみながら、実際にはありえない会話を繰り返す光景を映像化した。その他にも《北京日記》(2010)、《鶴沼相撲・京都ボクシング》(2010初演)など、資料調査に基づき当時の状況を再設定し、それを再編/再演することを通じて、共同体を形成しようとした日本の近代を考察する作品を発表。2010年頃からは《今日の踊り》(2012-13)などのパフォーマンスやレクチャーが増えている。

全4回にわたるオープンリサーチプログラムでは1. 日本近現代美術 2. 美術と公共性 3. 眞島竜男 4. 京都(仮)といったテーマを取り上げ、2015年のPARASOPHIAでの眞島の制作活動にも結びついていくことになる(予定)。

アーノウト・ミック Aernout Mik

1962年フローニンゲン(オランダ)生まれ、アムステルダム在住



Still from Aernout Mik, *Touch, rise and fall*, 2008. Video installation. Courtesy of the artist and carlier | gebauer

2000年ファン・アッペル美術館(アイントホーフェン)、ICAロンドン、2009年MoMA(ニューヨーク)、2013年アムステルダム市立美術館で大規模な個展を開催。2007年のヴェネツィア・ビエンナーレ(オランダ館代表作家)など、世界各国の多くの国際展に参加している。日本でも、2000年の「Still/Moving」(京都)、横浜トリエンナーレ2001、あいちトリエンナーレ2013などに出品している。ミックの作品の多くは、無音のマルチチャンネルのビデオを、彫刻的ともいえる建築空間に投影したビデオインスタレーションの形式をとっている。投影されているビデオは一見ドキュメンタリーのように見えるが、実際には現実の社会問題などに基づいたシナリオを俳優が演じているものである。しかしインスタレーションでは、観客の身体的空間と映像内の空間との融合が生まれるため、演じられた映像の方が本物のドキュメンタリーよりもリアルな体験として観客に伝わることになるのである。

スーザン・フィリップス Susan Philipsz

1965年グラスゴー(イギリス)生まれ、ベルリン在住
www.susanphilipszyouarenotalone.com



Susan Philipsz, *The Distant Sound*, 2014. Three-channel sound installation. Installation view, Moss, Norway, 2014. Photo by Eoghan McTigue. © Susan Philipsz

初期の作品は彼女の歌唱を唯一の音源(楽器)として使い、民謡やポップスを歌う彼女の声をシンプルなスピーカー構成で作品化する。作品は美術館やギャラリーではなく、バス停や高架下、スーパーマーケットなどの日常的な騒音が混在する場所に置かれることが多い。設置場所に依って選ばれる歌は、しばしば政治的、社会的な意味を持っているが、フィリップスの優しい歌声は、歌詞が伝えるメッセージだけではなく、鑑賞者自身の個人的な記憶や感情を強く喚起し、聞く者に今いる場所の記憶を再認識させる。彼女の作品はサウンドインスタレーションとして分類されることが多いが、音を素材に時間と空間を分節する彫刻であるともいえる。2010年ターナー賞受賞後は、ドクメンタ13(2012)、マニフェスタ10(2014)、札幌国際芸術祭2014などに参加。PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015では、2000年にリュブリャナ(スロベニア)で開催されたマニフェスタ3の出品作と、京都でのリサーチをもとに構想中の新作を発表予定。

フロリアン・プムヘスル Florian Pumhösl

1971年ウィーン(オーストリア)生まれ、在住



Installation view, Florian Pumhösl at Miguel Abreu Gallery, New York, 2014

横浜トリエンナーレ2001、ドクメンタ12(2007)など多くの国際展に参加。近代の前衛的な美術・グラフィックデザイン・タイポグラフィ・建築などの特定の作品や作家についての入念な調査に基づき、時にはその調査や分析を視覚化する絵画作品や映像作品、インスタレーションを制作している。この調査ではプムヘスルの美術家としての視点が特徴的であり、美術史家のように作品の視覚的要素の起源を辿るのではなく、調査対象の視覚言語とその遷移に焦点を当て、自らそれらに直接関わりを持っている。ロンドンのリッソン・ギャラリーでの個展(2008)では、恩地孝四郎が1930年代に装丁した書籍を壁面ケースに陳列し、それらの書籍の熟覧をもとに合成樹脂とガラス板を用いて制作した自らの絵画作品と併せて展示した。

2014年春、恩地ならびにマヴォの村山知義や大正時代に活躍したその他の日本の前衛美術家について調査を行うために来日。現在はその調査をもとにした一連の新作と、その文脈を明らかにするものとして、日本の専門家との対話を参考に彼自身がキュレーションする展示構想を練っている。

ピピロッティ・リスト Pipilotti Rist

1962年グラース(スイス)生まれ、チューリヒ在住

www.pipilottirist.net



Pipilotti Rist, *Mercy Garden Retour Skin*, 2014. Audio video installation (photograph inspired by Yuji). Courtesy of the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine

ウィーンの工芸学校、バーゼルのスクール・オブ・デザインで学ぶ。音楽グループのステージデザイナーからメディアアートに進む。男性社会が女性に投げかけるクリシェを巧みに逆用しその偏見を暴露するとともに、「女性らしさ」の否定的な側面を肯定し、女性達を励ます作品を制作。この一連の作品の集大成である《Ever is Over All》は1997年のヴェネツィア・ビエンナーレで若手作家優秀賞を受賞。同作は日本では1999年に京都国立近代美術館で開催された「身体の夢」で初公開。近年の作品は家具や日用品などを取り込む大型のビデオインスタレーションが多いが、抽象的かつ装飾的な表現を通じた視覚原理への興味と豊かな色彩へのこだわりはより先鋭化している。彼女は質問に答える形で何度も、「私はただ【色】を世界に取り戻し、現実に近いようにしているんです」と語っている。

2014年4月にはPARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015の下見のため来日し、オープンリサーチプログラムとして京都国立近代美術館でレクチャーを行った。

アリン・ルンジャン Arin Rungjang

1975年バンコク(タイ)生まれ、在住



Installation view of Arin Rungjang, *Golden Teardrop*, 2013. Video installation. Photo by Kornkrit Jianpinidnan, courtesy of the artist and the Office of Contemporary Art and Culture, Thailand

2002年シラパコーン大学絵画・彫刻・版画学部版画学科卒。在学中のバリへの交換留学を経て、2005年以降、フィリピン、台北、ロンドン、アントワープ、ニューヨークでレジデンスプログラムに参加。シグネチャー・アート・プライズ2014のファイナリストに選ばれている(賞は2014年11月に発表)。

2013年のヴェネツィア・ビエンナーレでは二人のタイ代表作家のうち一人として、真鍮の「涙滴」による緻密な彫刻インスタレーションとビデオとで構成される作品《Golden Teardrop》(2013)を出品。本作では卵黄を使ったタイの伝統的な砂糖菓子「トーン・コート」(金の滴)を出発点として、15世紀・17世紀・20世紀・21世紀のタイ・ギリシャ・ポルトガル・日本の個人の話と砂糖の交易史を緩く丁寧に重ね合わせ、広義の歴史や記憶、その編纂や生成について再考している。

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015で発表する新作の制作を始めるために、2014年6月に京都を訪問。この新作と併せて、ヴェネツィア以降も進化を遂げた《Golden Teardrop》の日本初展示を予定している。

笹本晃 Aki Sasamoto

1980年横浜(日本)生まれ、ニューヨーク在住

www.akisasamoto.com



笹本晃《Skewed Lies》2014 京都にて 写真: 館かほる

日本で高校を中退し、イギリスとアメリカの大学や大学院にて数学、ダンス、美術、彫刻などを学ぶ。コロンビア大学大学院美術課程修了。空間を彫刻的に分節し、その環境の中で自らの身体によるダンス、言葉、モノを用いて即興的なパフォーマンスを行う作品を数多く発表している。彼女の日常的な出来事や行為から着想され即興的な展開に見えるその作品は、実は緻密に構成されたもので、インスタレーションの静止空間と動的パフォーマンスとが複雑に交差する迷宮的物語世界となっている。横浜トリエンナーレ2008、ホイットニー・ビエンナーレ2010、第9回光州ビエンナーレ(2012)、六本木クロッシング2013(森美術館)などに参加。2014年にはニューヨークのオルタナティブスペース、ザ・キッチンにて『Sunny in the Furnace』を発表した。

京都で行った、西陣織や鍛冶の職人、仏具師たちの体の動きの研究、その仕事環境や産業の現状などのリサーチを踏まえ、PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015の会期中には、西陣地区に所在する堀川団地でのインスタレーション+パフォーマンスを予定している。

高嶺格 Tadasu Takamine

1968年鹿児島(日本)生まれ、秋田在住



高嶺格《ジャパン・シンドローム〜ベルリン編》2013 パブリックビューイング(映像+パフォーマンス)京都市役所前 2013 Photo by Tetsuya Hayashiguchi

京都市立芸術大学在学中よりダムタイプのパフォーマーとして『S/N』など3作品に参加。作品は、映像や音響を用いたインスタレーション、写真、映像、造形物、自ら出演/演出するパフォーマンスなど多様な表現の形をとる。在日韓国人の恋人との関係を出発点に、朝鮮人強制労働の歴史を遺す丹波マンガン記念館内坑道跡で生活し制作した《在日の恋人》(2003)。土や廃材を敷き詰めた空間とそこに投影された鹿児島弁とエスペラント語のテキストで構成するインスタレーション《鹿児島エスペラント》(2005)。千人の鑑賞者を巻き込み京都市役所前を熱狂的なダンスフロアに変えた《ジャパン・シンドローム〜ベルリン編》(2013)のパフォーマンスなど、知的な批評/皮肉とユーモアが交錯するそれらの作品は常に自らの身体や生身の人間を基点としており、共同体の中で共有しながら言語化されない、私たちと禁忌との共犯関係をあぶりだす。2011年より継続してきたシリーズ「ジャパン・シンドローム」の最終章となる新作パフォーマンスを2014年9月に京都で行った。

田中功起
Koki Tanaka

1975年益子(日本)生まれ、ロサンゼルス在住

www.kktnk.com/alter

twitter.com/kktnk



田中功起(a behavioral statement (or an unconscious protest)) 2013 第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展 日本館での展示風景 2013 写真:木奥恵三 Courtesy of the Japan Foundation

2005年東京藝術大学大学院修士課程修了。台北ビエンナーレ(2006)、第7回光州ビエンナーレ(2008)、「映画をめぐる美術」(京都国立近代美術館・東京国立近代美術館、2013-14)、「ジャーナル」(ICA、ロンドン、2014)、「ポジションズ」(ファン・アッペ美術館、オランダ・アイントホーフェン、2014)など多数のグループ展に参加。2013年のヴェネツィア・ビエンナーレでは、彼が参加した日本館が特別表彰を受ける。ドイツ銀行グループの2015年「アーティスト・オブ・ザ・イヤー」に選出されている。出来事の体験とその映像記録を体験することとの差異、映像の編集過程で生まれる元の出来事とのズレなど、プロジェクトを記録し編集したビデオ作品を通じて、記録と記憶を巡る多様な問題の考察を続けている。2009年よりポータルサイト「ART IT」で「往復書簡 質問する」を連載、書籍化される。

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015では、京都で制作する新作の発表を予定している。

アナ・トーフ
Ana Torfs

1963年モルツェル(ベルギー)生まれ、ブリュッセル在住

www.anatorfs.com



Detail from Ana Torfs, *Family Plot*, 2009-10.
© photo: Ana Torfs

ルーヴェン・カトリック大学コミュニケーション科学修士課程ならびにシント=ルーカス・ブリュッセル美術大学映像学修士課程修了。ビデオ、版画、スライド投影、フィルム、サウンド、写真、シルクスクリーン、タペストリーなどの様々なメディアを用いる。トーフの作品ではテキスト/言語とイメージとの関係性あるいは緊張関係が中心的な役割を担っており、併せて表象、解釈、翻訳といった関連行為も重要な役割を果たしている。彼女によって、文化や政治の歴史にまつわる様々な物事についての時事性を帯びた確かな理解が可能となる。しばしば既存のテキストやイメージを作品の出発点として用い、緻密に構成され曖昧な隠喩に満ちたコラージュやモンタージュを制作する。デュッセルドルフ・ゲネラリ財団のK21(「Album/Tracks A+B」2010)やブリュッセルのWIELS現代美術センター(「Echolalia」2014)にて個展開催。近年ではマニフェスタ9(ベルギー・ヘンク、2012)、第11回シャルジャ・ビエンナーレ(アラブ首長国連邦、2013)、シカゴ現代美術館「The Way of the Shovel」(2013)、第1回カルタヘナ・デ・インディアス・ビエンナーレ(コロンビア、2014)に参加。日本では、京都国立近代美術館(2013)、東京国立近代美術館(2014)を巡回した「映画をめぐる美術 — マルセル・ブローターズから始める」に出品。

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015では、トーフの植物のラテン語の学名への興味から出発するインスタレーション作品《Family Plot》の展示を予定。

ローズマリー・トロッケル
Rosemarie Trockel

1952年シュヴェアーアテ(ドイツ)生まれ、ケルン在住



Installation view of Rosemarie Trockel, *As far as possible*, 2012. Mixed media (steel, plastic, fabric, mechanic birds, glass, audio; ceramic; tiles; plastic; digital print). Courtesy of Sprüth Magers

1998年よりデュッセルドルフ美術大学教授。ケルンの美術学校で学び、陶磁やブロンズを使ったオブジェ、写真や映像によるコラージュ、身体に描かれたドローイングなど様々なメディアや手法で制作を行う。80年代後半には機械編みニットを用い、既知のロゴマークをパターン化した作品で国際的な評価を受け、90年代以降は現代美術界をリードする女性作家の一人として多くの展覧会で作品を発表してきた。1999年のヴェネツィア・ビエンナーレにはドイツ館初の女性代表作家として参加。自然史や動物学、植物学、鉱物学からも学び、表現へと昇華させるプロセスを重要視している。2012-13年にスペイン、アメリカ、イギリスを巡回した個展「A Cosmos」では、時代・ジャンルを超えて自身がインスピレーションを得た他作家の作品をも内包した展覧会を構築し、観る者をその世界観に誘った。

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015では同展より一部屋全体が作品である《As far as possible》の出品を予定。トロッケル独自の表現美学を体感できる。

ヤン・ヴォー
Danh Vo

1975年ハリア(ベトナム)生まれ



Danh Vo, *Tombstone for Phùng Vo*, 2010. Black absolute granite, gold. T.B. Walker Acquisition Fund, 2011. Installation view, Minneapolis Sculpture Garden, Walker Art Center, January 3, 2013

デンマーク王立芸術アカデミー卒、フランクフルト造形美術大学卒。2012年、ヒューゴ・ボス賞受賞。2014年にはイギリス・ノッティンガム、ニューヨーク、北京で個展を開催しており、2006年以降、欧米を中心として個展を多数開催している。また、ヨーロッパではフェリックス・ゴンザレス=トレスの個展(2010)など、いくつかの展覧会のキュレーションも行っている。マニフェスタ7(2008)、横浜トリエンナーレ(2008・2014)、ベルリン・ビエンナーレ(2010・2014)、2010年の光州ビエンナーレ、2011年のシンガポール・ビエンナーレ、2013年のヴェネツィア・ビエンナーレなど、多くの国際展に参加。その作品は世界各国の公的機関に作品が収蔵されている。2015年のヴェネツィア・ビエンナーレのデンマーク代表作家としての参加が本年6月にデンニッシュ・アート・ファウンデーションから正式に発表された。

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015では、新作の発表を予定している。

王虹凱
Hong-Kai Wang

1971年虎尾(台湾)生まれ、ウィーンおよび台北在住

www.w-h-k.net



Hong-Kai Wang, *Music While We Work*, 2011. Production shot. Photo by Chen You-Wei

現在、ウィーン美術アカデミーで博士課程に在籍中。2011年のヴェネツィア・ビエンナーレでは台湾代表の一人に選ばれ、日本統治時代に設立されかつて製糖産業で栄えた虎尾市にある台湾糖業会社の元・労働者とその家族が、日々の労働の音を収集するワークショップシリーズを基に制作した《Music While We Work》(2011)を出品した。また、12人の作曲家たちが自身の地政学的な境界の横断経験を共有する無秩序な会話から生まれた習作を上演した《What's the musical consequence of change?》(2013)、「ローカル」を定義づけている可視/不可視の境界を問う《Oath of Love》など、彼女の作品は長い時間をかけた人々との対話と忍耐強い共同作業を基本としている。それは公共空間の生成と力学についての、そして人々の社会での関係性と文化的な記憶の生成と保存/上書きについての社会政治学的な優れた分析と考察であり、サウンド、ビデオ、パフォーマンス、ワークショップ、テキストを用いて美術作品の形をとった報告書とも言える。PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015では《Music While We Work》の展示に加え、京都でのリサーチを踏まえた新しいプロジェクトを計画している。

やなぎみわ
Miwa Yanagi

1967年神戸(日本)生まれ、京都在住

www.yanagimiwa.net



やなぎみわ《『日輪の翼』上演のための移動舞台車》2014
写真:沈昭良

制服姿のエレベーターガールの写真シリーズなど、現代社会に生きる女性を扱った作品で90年代半ばから注目を集める。最初期の作品に案内嬢を使ったパフォーマンスがあり、その後の写真・映像作品にも演劇的側面は重要な作品要素であった。近年その演劇志向はより強まり、築地小劇場を題材とした演劇三部作『1924』(2011-12)が上演された。匿名の声というメディアに取り組んだ『ゼロ・アワー〜東京ローズ最後のテープ〜』(KAAT神奈川芸術劇場、愛知県芸術劇場 [あいちトリエンナーレ2013]) を作演出。写真作品のモデルであった「案内嬢」は、劇中で狂言回しとして登場している。

ヨコハマトリエンナーレ2014では、中上健次の『日輪の翼』を舞台化するための移動舞台車を発表。PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015では、台湾から横浜港へと輸入されたこの舞台車を引き継ぎ、制作・展示・パフォーマンス・演劇公演の実現を目指している。このプロジェクトは二つの国際展を横断するという画期的な試みとなる。

パブリックプログラム

多様なコミュニティとPARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015が相互にアクセスし、それぞれの視点や考え方を共有するパブリックプログラムを不定期に開催しています。2014年2月から3月にかけては、プレイベント[作品展示]ウィリアム・ケントリッジ《時間の抵抗》に関連して、映像史、哲学、物理学などの分野から作品について思索を深めるプログラムを行ってきました。今後も作家自身やその作品に対して様々な方法でプログラム参加者とともにアプローチし、参加者自身がPARASOPHIAを楽しめるようになるきっかけをつくります。

Parasophia Conversations

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015では、様々な人が会話し、作品を読み込む、言葉の発信と流通のプラットフォームとしてParasophia Conversationsを開始します。

第1弾として、海外の研究者とともに、先鋭的で柔軟な思考が自由に行き交うマルチチャンネル討論の実験を行います。

アレクサンダー・ザルテン×北野圭介「21世紀のイメージ・トラフィックを考える」

プレゼンテーションとディスカッションを多方向に交差させる、マルチチャンネルの討論イベントを通じて、映像にかかる今日のサーキュレーションの行方を考察する。

コーディネーター兼モデレーター:アレクサンダー・ザルテン(ハーバード大学)、北野圭介(立命館大学、PARASOPHIAプロフェッショナルアドバイザーボード)

日時:2014年11月16日(日)

場所:未定

その他

PPP

PARASOPHIAポスターを10月より連続して制作(デザイン:西岡勉)するにあたり、掲出を希望する個人・団体に対し毎月ポスターを送付し、自分の決めた場所にポスターを貼っていただくPPP(Parasophia Poster Project)を発足。SNSなどで簡易な拡散がスタンダードになる中で、ポスターという物や半年という時間、また掲出という積極的な行為を通してPARASOPHIA独自の関係性を作っていくというプロジェクトです。WEBより申し込み可能。

PARASOPHIA サポートスタッフセンター

京都芸術センター内にPARASOPHIAサポートスタッフセンターを開設。会期中の運営業務を支えてくださるサポートスタッフを募集します。

www.paravol.jp

パラ人

PABメンバーの吉岡洋氏(京都大学大学院文学研究科美学美術史学教授)と学生等有志らによって制作されるフリーペーパー『パラ人』。これまで3号を発行。

「アラン・セクーラ、写真とテキスト、イメージと地政学のあいだ」(表象文化論学会第9回研究発表集会)の共催

PABの北野圭介氏(立命館大学映像学部教授)、佐藤守弘氏(京都精華大学デザイン学部教授)が、前川修氏(神戸大学教授)、番場俊氏(新潟大学准教授)など表象文化論学会に所属する日本の研究者とともに、多くの美術家や研究者に影響を与えた写真家アラン・セクーラ(Allan Sekula, 1951-2013)の実践と研究を改めて考える研究発表集会を11月8日-9日に新潟にて開催。www.repre.org

琳派400周年記念祭との連携

京都を中心に活動する新進若手作家を紹介し、作家が創造するみずみずしい作品を京都から世界へ積極的に発信していくことを目的として「琳派400周年記念 新鋭選抜展 ～琳派の伝統から、RIMPAの創造へ～」(2015年1月24日(土)-2月8日(日)/京都府京都文化博物館)を開催。

広報画像の使用について



Lisa Anne Auerbach, *American Magazine #1*, 2013. Ink on paper. Installation view with mega-girls, Los Angeles Municipal Art Gallery, 2013. Photo by Lisa Anne Auerbach, courtesy of Lisa Anne Auerbach and Gavlak. © Lisa Anne Auerbach



蔡國強「農民ダ・ヴィンチ」2013 サンパウロ、ブラジル銀行文化センター屋外での展示風景 Photo by Joana França



Still from Joost Conijn, *Vliegtuig (Airplane)*, 2000. Video, 29 min.



Installation view of Stan Douglas, *Luanda-Kinshasa*, 2013. Single-channel video projection, 6 hr. 1 min. (loop), color, sound



PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015 オープンリサーチプログラム03[レクチャー/パフォーマンス]ドミニク・ゴンザレス=フォレストル「M.2062 (Scarlett)」京都府京都文化博物館別館 2013年9月6日 写真:林直 提供:PARASOPHIA事務局



Still from Aernout Mik, *Touch, rise and fall*, 2008. Video installation. Courtesy of the artist and carrier | gebauer



Susan Philipsz, *The Distant Sound*, 2014. Three-channel sound installation. Installation view, Moss, Norway, 2014. Photo by Eoghan McTigue. © Susan Philipsz



Pipilotti Rist, *Mercy Garden Retour Skin*, 2014. Audio video installation (photograph inspired by Yuji). Courtesy of the artist, Hauser & Wirth and Luhring Augustine



Installation view of Arin Rungjang, *Golden Teardrop*, 2013. Video installation. Photo by Kornkrit Jianpinidnan, courtesy of the artist and the Office of Contemporary Art and Culture, Thailand



やなぎみわ『日輪の翼』上演のための移動舞台車 2014 写真:沈昭良

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015の広報用画像をダウンロードできるページをご用意しております。

印刷用の高解像度画像(350 dpi/CMYK)とオンライン用画像(1024 px/72 dpi/RGB)の2種類からお選びいただけます。下記ウェブサイトよりご登録の上、ダウンロードください。サイズの大きな画像、また掲載していない画像が必要な場合は広報担当宛にお問い合わせください。

www.parasophia.jp/press

PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015の取材・撮影をご希望の方は下記お問合せよりお申し込みをお願いします。

京都国際現代芸術祭組織委員会事務局(PARASOPHIA事務局)

広報担当: 大西 MOBILE: 080-9684-9100

E-mail: info@parasophia.jp (一般掲載用) E-mail: press@parasophia.jp (広報お問合せ用)

〒604-8152 京都市中京区烏丸通蛸薬師下ル手洗水町645 flowing KARASUMA 2階

TEL: 075-257-1453 FAX: 075-257-1454